

李學勤著、小幡敏行譯、佐野光一閱『中國古代漢字學の第一歩 古文字學入門』（凱風社、一九九〇年）

本書は中國で著名な歴史學・古文字學家である李學勤氏（現清華大學出土文獻研究與保護中心教授）により、中國の古文字の初學者に向けて執筆された『古文字學初階』（中華書局、一九八五年、文史知識叢書之一）の和譯である。その章立ては、一「古文字學とは何か」、二「漢字の形・音・義」、三「文字の起源に關する謎」、四「甲骨學の基礎知識」、五「金文のいろいろ（上）」、六「金文のいろいろ（下）」、七「戰國文字の研究」、八「紙以前の書籍」、九「『小學』の寶庫」、十「研究の方法と心得」、十一「必要最低限の參考書」、十二「十五の課題」、の十二章となっている。

本書の内容は、四・七・一〇・一二章についてはその章名が示す通りである。それ以外の章について、簡単に紹介することにする。一・二では、古文字がどのように昔から研究されてきたのかについて述べる。三では、新石器時代に陶器上に書かれた文字と思われる符號について紹介する。五・六は、青銅器に鑄造された文字である金文の基礎知識が記された章である。ここでは、様々な青銅器が圖入りで紹介され、殷から秦漢時代までの青銅器とその銘文の特色を解説する。また、金文にはどのような内容のものがあるのかという事例が、西周・春秋時代を中心に紹介されている。八は、紙以前に文字を書寫するために使った、竹や木で作られた簡冊と白い絹織物である帛書について述べる。九の「小學」とは、過去の學者が呼んだ文字の研究のことで

ある。その文字學の研究では「說文學」が現在の古文字學との關係が密接であるため、後漢時代の許慎によって書かれた『說文解字』を中心にその内容が述べられている。一は、甲骨文・金文・戰國文字・秦漢の文字の參考書の紹介がなされており、中國の參考書が中心ではあるが、日本語で書かれた參考書も紹介されている。

本書は二〇〇頁を少し超える分量であるが、そこには古文字を學ぼうとする初學者が參考とすべき基本的な事柄が數多く書かれており、古文字を學ぶための入門書として最適である。（三輪健介）